

第1章 経験的性格の信仰か組織制度偏重のそれか（1）

アメリカのキリスト教界を見ると、今日、一見 相矛盾する2つの現象が見て取れると言えよう。一方で、それがかつてない隆盛期の最中にあることを示すしるしが数多く認められること。他方、しかし同時に、疑念と警告両方の点から声が上がり、それが高まりを見せていることである。何かしら重大な点で 事実、昨今のキリスト教は真つ当でない、と その声は強調して言う。

これら相反する見解のいずれが正しいのであろうか。あるいは、どちらの見方にもまさに、それなりに妥当性があると言えるのか。だとしたら、より本質的に重大であって、それゆえ、我々が一義的に関心を向けねばならないのはいずれの見解なのだろう。

信仰復興のしるし

現下の世代でキリスト教の信仰復興が起きているのは明白である。キリスト教会全体の会員総数は史上最多に達した。1850年には、あらゆる教会を含めても、国民全体の16%しか 教会員はいなかった。が、1900年までの 続く50年間に、これが36%に上昇。さらに、1940年には、教会員総数49%。1960年には、63.4%と上昇している。なかでも、1920年から1940年までの20年間は 教会員の増加率がわずか6%だったのに対し、1940年から1960年の20年間は14.4%の増加となっている。日曜学校を見ても、1943年の時点では（この年のほうが1940年よりも より適切な統計が得られている）、学校数 およそ213,000、在籍数は25,000,000をわずかに上回るものだった。それが1960年には、286,000以上の日曜学校に、44,000,000超の在籍者となっている。¹これは、ほぼ20年にわたって在籍数が年間100万も増加したことを示しており、驚くべき成長である。

教会の礼拝出席も同様に、増加を遂げた。ギブソン・ウインター（Gibson Winter）⁽¹⁾ は次のように指摘している。「成人の教会出席を調べた輿論調査の示すところによれば、面接調査の前週 教会に出席した人の数は、1939年が回答者の41%だったのに対し、1957年には それが51%になっている」。²さらに、最も伸張著しい分野の一つは財政の分野である。1940年から1960年にかけて、教会への献金額は倍以上になった。報告によれば、1940年の献金総額は1,100,000,000ドル余。それが1960年には、2,300,000,000ドルをわずかながら超えたのである。一人当たりの額では、1950年が30.51ドル。それが、1960年には62.25ドルとなっている。経済のインフレにもかかわらず、これは大きな増加と言える。

教会建築も新たな高まりを見せている。新規の教会が建てられるとともに、古くなった教会が改築されたり、追加の増築が進められたりしている。建築が財的状況と直結しているのは事実で、我々は近年、好調な時を迎えている。しかも、現在の建築ブームをかつての同様な年度、1928年と比べると、現下のそれはほぼ400%の増加を示していることが分かる。教会建築は実に、「経済規模第4位

の民間建築分野」となった。諸教会が「自らの献身の目に見える象徴としてこれを建築した」からである。³

統計のみをもって宗教的関心の深さをはかることはできまい。また、上に記したようなものだけが成功のしるしとして挙げられるべきとも思われない。しかしながら、以上の現状はたしかに、事が発展を遂げており、我が国の多くの人々が現在、キリスト教に関心を持ち、これに注目していることを示すものと言えよう。

いかなる類いのキリスト教か

このように、数々のしるしが示唆するとおり、とりわけこの20年、キリスト教信仰にかなり顕著な復興が起きていることが分かる。これを称し、「キリスト教信仰のリバイバル (revival of religion)」と呼ぶ者もいれば、「キリスト教への関心 (interest in religion) [の再燃]⁽²⁾」と言う者もあり、さらには「神への敬虔の高まり (surge of piety) [の再来]」と語る者も見られる。いかなる名でその特質を表現しようとも、否定できないのは要するに、「上向きの傾向 (upswing)」が確かにキリスト教に見て取れるということである。こうした進展状況はこのところその勢いが多少鈍化してきてはいるものの、アメリカにおけるキリスト教の先行きについて多くの人が抱く楽観的な見方に後退の気配は感じられない。

こうしたなか、時とともに多くの疑問が呈せられ、懸念の声が高まりを見せているのがしかしながら、次のような問題である。「我々の世代が経験しているのはいかなる類いの信仰復興か。確かにキリスト教信仰の復興なのか。すなわち、新約聖書が教える信仰のそれなのか。それとも、本来のキリスト教信仰とはどこかしら異なるものか。我々はキリスト教を、外面的には新約聖書の信仰を保持しつつも、その中心に別物の何かを据えたそのようなものにしてしまっていないか」

こうした問題に対し、クレア・コックス (Claire Cox)⁽³⁾ は次のように述べている。

この国に、新時代のキリスト教が登場した。このキリスト教は教会をかつてないほど人気のある所とし、繁栄をもたらしている。と同時に、それは教会を敬虔さの薄いところにしてきている。・・・キリスト教のこの現象はいったい何なのか、確かなことは誰にも分かっていない。教会に携わる多くの者たちがこの問題について思案し、繰り返し頭を悩ませている。キリスト教への関心が高まっているのは間違いない。・・・だが、この急激な宗教的高揚は、[社会の]鬱々としたものを背景にしているようにみられる。すなわち、賄賂から始まり、テレビのクイズ番組での「不正工作 (fixes)」や警察官の不祥事、またレイプ・殺人・強盗・横領の増加、さらには未成年者の犯罪やアルコール中毒、離婚の発生率の上昇といった現状である。⁴

アメリカで今日再興しているこのようなキリスト教について、ロイ・エッカート (Roy Eckardt)⁽⁴⁾ はこれを「民間信仰 (folk religion)」と呼んでいる。

「民間信仰」という呼び方が妥当なのはまさに、「信仰を^よ振りどころに（turn to religion）」という動きが極めて広範な庶民のそれになっている、という事実による。・・・民間信仰というのは、「庶民（folks）」のための信仰のことである。その特色は、これが人々と信仰のいずれをも大いに重んじることにある。・・・信心によって、人間の基本的諸問題は、個人的性格のそれであれ 社会的性格のそれであれ、どちらも解決することができる。しかも、さしたる困難もなしに。信仰が その有用性によって特徴づけられている。⁵

さらにはまた、我々は新約聖書の信仰というより、実際には「アメリカ的な新宗教（new American religion）」を発展させたのだ、と考える人々もいる。そしてそれは 現代社会における最高の倫理基準と同一視される傾向にある、と言う。この「アメリカ的な新宗教」への関心とその実践は極めて深く社会に浸透し、大いに現実のものとなっている。ただ一つ、それが新約聖書の信仰と同一とは言えないところに問題がある、と言うのである。ウィル・ハーバーク（Will Herberg）⁶も昨今の宗教現象を鋭く分析し、我が国に現在見られるのは ある種「それとなくある信仰（religion in general）」とでも呼ぶべきもの、と述べている。つまりは、「アメリカ的な生活様式（American way of life）」をもって良しとするもの、と言うのである。教会員は自国の生活の仕方に深く浸り入り、それは紀元1世紀の「あの道（the way）」⁶を^{しの}凌ぐまでになっている。実際、アメリカ的な生活様式と「あの道」とが同じものと同一視されているようにも見える。より深く探ってみると、平均的なアメリカ人は 実のところ、^{みづか}自らの信仰そのものを脅かしかねない人間以上に、そのアメリカ的な生活様式に脅威を及ぼす人間のほうが気にかかり、これと対立的になることが分かる、とハーバークは語っている。⁶

こうしたなか 警告として発せられているのが、この「アメリカ的な新宗教」では 新約聖書のキリスト教信仰を特徴づける本質と生命力の多くが失われてしまった、ということである。このようにして生じた変化を、マーティン・E. マーティ（Martin E. Marty）⁷は次のように言い表わしている。

プロテスタントのキリスト教徒がアメリカに渡ってきた時から・・・現在に至るまで、プロテスタント教会はこれを取り巻く周囲の状況と活発なやり取りを続けてきた。その結果 生じた特色を、我々は侵食という言い方で表現した。絶え間のない摩擦によって ^{かど}ゴツゴツしたその角が^{こす}擦り落^おとされた、ということである。プロテスタントならではの特質やその果敢な証^{あか}しが^す摩り減^へつて、角を落とす傾向に向かった。アメリカという環境にそぐわない側面は、その色合いが弱められた。教会と世界とが^{わぼく}和睦を結んだのである。こうして、キリスト教がアメリカ化され、アメリカがキリスト教化され、どちらもが受容されて満足するところとなった。⁷

もちろん、これまでの論述から またこの先のそれから、現在の教会にはもはや 自身の信仰としてイエス・キリストを心から信じ、これに^{みづか}自らを深く^{ささ}げている人たちはいない、と考えるべきでないのは言うまでもない。だが 残念ながら、そうした人々はやはり 今や多くはなく、常に^{あら}非^{あら}ずと言わざるをえまい。キリスト教信仰は人の根元的な生き方に関わるもので、そこでは今以上に深いこ

とか問われて求められるということ。そのことを、昨今の教会の平均的メンバーを見ると、知的理解としても認識しているようには見受けられないし、そのような生き方を身をもって実践しようとする真剣さも感じられないからである。

たしかに、いわゆる教会員と呼ばれる人は神を信じてはいる。実際、輿論調査の示すところによれば、我が国の全人口の90%以上が〔広義の意味で〕神への信仰を明らかにしている。しかし、問題はいかなる神なのか、いわゆる教会員と言われる我々が信じているのは、ということである。それははたして、アブラハム、イサク、ヤコブの神か？ 聖にして厳肅なるお方で、死すべき人間がその神的臨在を前にするとき、こうべを垂れて崇め畏まるばかりの、そのようなお方なのだろうか？ いや、この時代の傾向はそうしたものではない。アメリカ人はたしかに神を「知る (know)」ようにはなったが、ただそれにとどまらず、神と「仲良し (chummy)」にまでなってしまった。それは時に「心地いい人 (living doll)」であり、また時に「気軽に相談して頼める、2階の御近所さん (man upstairs)」でもある。我々は神を好んでいるし、神も我々の味方をしてくれる。この神は、ウィリアム・H. ホワイト (William H. Whyte) ⁽⁶⁾ も言うように、「社会に微笑みかけ、その語るところは聞く者の気持ちを楽しにしてくれる。叱ったりはしないし、要求することもない。社交的な神であって、周囲を見渡せば、社会の中、にこにこした楽しげな人たちの間に見出すことができる。宣伝文句にあるように、信仰は "ファン (fun)" で、楽しめるのだ」⁸

(続く)

注

1. *Yearbook of American Churches for 1961* (New York: National Council of the Churches of Christ in the U.S.A., 1960) 264, 279.
2. Gibson Winter, *The Suburban Captivity of the Churches* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1961) 30.
3. Martin E. Marty, *The New Shape of American Religion* (New York: Harper Bros., 1959) 15.
4. Claire Cox, *The New-Time Religion* (Englewood Cliffs NJ: Prentice-Hall, Inc., 1961) 1-2.
5. Roy Eckardt, *The Surge of Piety in America* (New York: Association Press, 1958) 43.
6. Will Herberg, *Protestant, Catholic, Jew* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1955) 89-90.
7. *Ibid.*, 108.
8. William H. Whyte, Jr., *The Organization Man* (New York: Simon and Schuster, 1956) 254.

訳注

(1) アメリカのプロテスタント神学者。1916～2002年。シカゴ大学神学院教授、プリンストン神学校教授等を歴任。教会と社会の問題を中心に論じた。

- (2) [] 書きは、訳者の補筆挿入。
- (3) アメリカのジャーナリスト。
- (4) アメリカのプロテスタント神学者。1918～1997年。米国宗教学会会長、リーハイ大学宗教学科科長等を歴任。特にユダヤ教とキリスト教の関係について、アメリカを代表する論者の一人となった。
- (5) ユダヤ系アメリカ人の宗教社会学者。1901～1977年。ドルー大学で教鞭^{きょうべん}を執った。
- (6) 使徒言行録に「(この)道」という表現で繰り返し出てくる「主の道」のこと。「わたしは道」(ヨハネ 14:6)と言われたイエス自身の言葉をも示唆。
- (7) アメリカのプロテスタント・キリスト教史家。1928年～。元・シカゴ大学神学院教授。とりわけ、近代アメリカキリスト教史の学者として著名。
- (8) アメリカの社会学者、評論家。1917～1999年。社会や組織と個人の関係について、特に文化的圧力の観点からこれを考察したことで知られる。

(矢野 眞実訳)